

# 内包量から思考へ

## —ドゥルーズ「思考論」に向けた準備的考察—

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

### 【目次】

- 0. はじめに
- 1. 内包量を巡るドゥルーズとカント
  - 1.1 カントにおける内包量
  - 1.2 ドゥルーズによるカント批判
- 2. コーヘンによるカント批判
- 3. 微分から思考へ
- 4. 「思考の発生」を巡る問題系
- 5. 結論に代えて

### 0. はじめに

内包量はドゥルーズ哲学の核心に位置する概念の一つだが、哲学的にも諸論者の見解が錯綜している上、それが微分や連続律といった複雑な諸概念と深く関係するものであるが故、内実理解が難しいものの一つでもある。本稿ではドゥルーズが批判的に乗り越えようとしたカントの理論、彼が援用したコーヘンやヴェイユマンの理論へと逆行しつつ、ドゥルーズ哲学の体系内で内包量概念が持つ内実やその位置づけを理解する作業を進めたい。その作業は、ドゥルーズ独自の「思考」に関する着想の再検討の必要性を我々に促すものともなるだろう。

### 1. 内包量を巡るドゥルーズとカント

#### 1.1. カントにおける内包量

前期主要著作『差異と反復』（1968）全体においてドゥルーズは、「敵」であるカント哲学の枠組みを様々な角度から超克しようと試みている。内包量概念はドゥルーズがカント哲学の内に見出す、カント自身が封印してしまった「可能性の中心」

だとも言えよう。まずは、カント哲学において内包量とはいかなる場面で登場するものだったか、確認しよう。場面は『純粹理性批判』原則論である。カントは「直観の公理」の箇所を外延量を、「知覚の予料」の箇所で内包量を定義する。

「直観は全て外延量である」という命題が、「直観の公理」である。外延量とは、「その中では部分の表象が全体の表象を可能とするような量」と定義される。典型的事例としては「一本の直線」が挙げられる。「知覚の予料」の原理については、哲学的には周知のように、『純粹理性批判』第一版（A版）と第二版（B版）との間に定義の相違が存在するのだが、ここではA版とB版との相異に関する諸解釈の吟味には立ち入らず、第二版（B版）の定義に注目しよう。

「全ての現象において、感覚の対象をなす実在的なものは、内包量、即ち度を有する。」（B207）

この「内包量=度」と称されるものは「一本の直線」のように「部分の表象」が「全体の表象」を可能とする量ではない。ここでは例えば「赤さ」や「熱さ」が特定の「度合」を持ちつつ立ち現れることを考えれば良い。坂部恵の言葉を援用すれば、一つの赤色は、基準となる単一性（単位）の総計として表現される外延量は持たず、「数多性がそこでは否定性=0への接近によってのみ表象されるような」内包量=度を持つ。また内包量としての質感は、その感覚の消失としての否定性=0を地とし、否定性=0との間に張り渡された一つの内的張力或いは緊張という図柄として立ち現れてくる、と坂部は言う。<sup>1</sup>「赤さ」や「熱さ」が、漸増し或いは漸減する「度合」を持つという、経験上明白な事態が内包量と称されると言って良い。

哲学史の復習になるが、内包量がこう定義される「知覚の予料」の議論とはどのような意味を持たされているものだったか。高峰一愚による古典的表現を借りれば、そもそも「予料」とは「経験的認識に属するものを先天的に認識し規定することができる為のあらゆる認識」のことを言い、「本来は後天的な知覚や感覚に当てはめられるものではない。」しかし、「カントは敢えて知覚について〈予料〉の語を用い、感覚・知覚が有する度が数量的に取り扱われることにより、数学の先天的形式がこれに適用されうることを基礎づけようとした」とされる。つまりは、数学が実在の対象に適用されうることを保証するために、内包量の議論が必要だということである。<sup>2</sup>

しかし、N・ケンプ・スミスは『純粹理性批判』の詳細な注釈書において、カントのこの試みは失敗したと判断している。彼によれば、カントが感覚の知覚の中に総合があるとみなす点に問題がある。例えばカントはこう言う。

「否定性=0に対立するものとして、感覚一般に対応する実在的なものが提示しているのは、その概念が一つの現実存在を含む或るもののみである。この実在的なものが意味指示しているのは、経験的意識一般における総合に他ならない。」

(A175-B217)

この文言でカントは、「単一の瞬間」の感覚に含まれると我々が表象しうるものとして、「ゼロから、与えられた経験的意識にまで至る斉一的進行の総合」を挙げていると解釈できる。しかしケンプ・スミスによれば、それはカントが自らのカテゴリー演繹体系の一貫性を保持する為に必要な主張に過ぎず、曖昧であり説得力に欠けている。確かに我々が素朴に考えても、「この赤さ」を感覚する単一の瞬間に、その感覚の度合を構成する漸進的系列を表象するという事態は、納得しがたい。つまりケンプ・スミスは内包量概念の規定が持つ曖昧さを指摘しているのだが、彼は他に、カントが「肯定・否定という論理的〈質〉」と、「感性的質の力

学的内包性」とを混同する点、単純な覚知を含む一切の覚知を一つの時間的過程とみなしたいという欲求をカントが持つが故に、空間・時間の連続性に似た一つの連続性を内包量へも適用してしまった点をその背景を成す論点として挙げている。<sup>3</sup>

さて、本稿はカントによる自然科学の基礎付けプログラムの成功如何を検討するものではない。寧ろカントの曖昧な表現を端緒として内包量概念の理解を深めることを目指す。付言すれば、本稿は坂部恵の次の言葉と関心を共有しているとも言えよう。

「あらかじめ唯一絶対の視点と焦点を持つ特権的な知の空間へと整序されることのない、多元的に分散した知の空間としての、知覚におけるものの立ち現れの次元。知覚の実質、言い換えれば、ものの何であるかというその質の原初的な立ち現れの次元。知覚の予料の原則において、とりわけ、カントは、このような次元のあり方を模索した。・・・」<sup>4</sup>

「知覚におけるものの立ち現れの次元」。内包量を考えることは、この次元を考えることである。

## 1.2 ドゥルーズによるカント批判

カント哲学はドゥルーズにとって、敬意を払いつつも乗り越えねばならない対象だった。次の引用に見られるように、彼は様々な箇所でもカントの秘めていた可能性を評価する。

「カント哲学には或る明確な契機、人知れず閃光を放った契機があり、それはカントにおいてすら継続せず、カント以後の哲学にはなおのこと引き継がれていないのだが、私達はカント以前とカント以後の出来事というよりも、寧ろそうしたカント哲学そのものの契機にこそ関心を寄せねばならない。」<sup>5</sup>

カントの内に秘められつつも、カント本人が封印してしまったカント哲学の可能性を改めて引き伸ばすことをドゥルーズは目指す。そのドゥルーズがカント哲学のいわば「鬼子」を産み出す為に

注目するポイントが、「知覚の予料」の原理、内包量である。ドゥルーズは『差異と反復』において内包量に関するカントの過ちを明瞭に指摘する。

「カントは、時間にも空間にも論理的な拡がり認めないまさにその時に、空間に幾何学的な拡がりを維持し、そして、一つの延長をしかじかの度で満たしている質料に内包量をとっておくという誤りを犯している。」<sup>6</sup>

この言葉の含意は明らかだろう。カント哲学の枠組では時間・空間は「直観形式」であり、直観による経験対象とはなりえない。直観対象となりうるのは部分の表象が全体の表象に先行しそれを可能にすると定義される外延量のみであるはずである。然るに、「知覚の予料」に関するカントの定義（「全ての現象において、感覚の対象をなす実在的なものは、内包量、即ち度を有する」）は、一方で「内包量＝度」は延長を持たない（外延量ではない）と定義しつつも、他方で同時に空間的拡がりのもとで「内包量＝度」を捉え、それを直観しようと言っているようでもある。カントのこの「内包量＝度」の定義の曖昧さをドゥルーズは批判していると言えよう。

ではドゥルーズは、「内包量」をどう押さえるべきだと考えているか。ドゥルーズは言う。

「ヘルマン・コーヘンが、カント哲学の再解釈において、諸内包量の原理に十全な価値を認めているのは最もなことである。」<sup>7</sup>

ドゥルーズが内包量の原理に十全な価値を認めるべきだと考える点、ヘルマン・コーヘンがその為に多大な貢献を為したと認める点は明らかだが、ドゥルーズはこれ以上のことを明白には述べない。そこで我々はコーヘン自身の著作に遡行し、ドゥルーズの言葉の含意を掘り下げていこう。

## 2. コーヘンによるカント批判

新カント派の代表格であるコーヘン哲学全体を見通すことは不可能である故、本稿ではカント解釈の古典として名高い『カントにおける経験の理

説』<sup>8</sup>と『微分法の原理とその歴史』<sup>9</sup>を適宜参照しつつ、コーヘンによるカント解釈、及びドゥルーズとの関連性を洗い出していきたい。

まず、コーヘンによるカント批判について。彼はカントが内包量の原理の定式化においていかなる過ちを犯したと解釈したのだろうか。

そもそも想起すべきは、カントにおける「直観の公理」の原理が外延量を扱う原理であるのに対し、「知覚の予料」の原理は内包量を扱う原理であることである。ここで、外延量は「比較可能な量」・「均質な単位を前提とする量」であり、それを基礎づける何らかのものを必要とするという点がポイントとなる。この外延量の「基礎づけ」を為す量が内包量であるはずなのだが、カントの提案する内包量はその役目を果たしえないとコーヘンは言う。どういうことか。

「カントは外延的直観の彼方に見出される基礎の実在から感覚へと向かうのではなく、感覚から出発する。そして彼は感覚の中に、感覚の度合いという名の下、実在を基礎づけてしまう。これによって、彼は原理の超越論的中心を欠いてしまうことになる。」<sup>10</sup>

実在をどこに位置づけるか、これがポイントである。後に見るように、コーヘンによればカントは「外延的直観の彼方」に達しなければならないことは理解していた。それこそが外延量を基礎づけるものになることも理解していた。それにも拘らずカントは「知覚の予料」の原理の定式化において、実在を「感覚の度合」に置いてしまう。赤色の度合が漸減したり漸増したりすることの中に、赤色の実在の生産を見てしまうのである。そうすることでカントは、「より多く・より少なく」という外延量の領域で使用される規定を超えたところにある、外延量を基礎づける何かに到達することができなかったのである。コーヘンはこのカントの過ちを「形象化の領域」と「基礎づけの領域」との混同だと表現する。

「<時間において或る感覚の度合からその感覚の

消失へと下降する、逆に無から徐々にその感覚の度合へと上昇する。このゼロへの下降と或る量への上昇において、連続律は少なくとも数学的形象化を獲得する。その結果カントは形象化の領域と基礎づけの領域とを混同してしまうのだ。」<sup>11</sup>

またコーヘンはこの点について、カントが「心理学主義」を乗り越えられなかったとも表現する。<sup>12</sup>それに対し彼は、単なる感覚の内に「実在」を位置づけてしまう「心理学主義」を採るのではなく、「内包量からの外延量の生産」にこそ「実在」を位置づけねばならないと言う。

コーヘンによればカントの規定にあるように、感覚の度合の上昇と下降の中に確かに連続性の数学的形象化は見出されるかもしれない。例えば我々は薄い赤色から濃い赤色への変化の中に連続性を見て取るだろう。そこから、感覚そのものが連続的であると判断してしまいがちでもある。しかしコーヘンの立場は、「私達は感覚<の>連続性ではなく、感覚<に向かう>連続性を認める」というものである。<sup>13</sup>つまり彼は、感覚そのものが連続的なのではなく、感覚を生み出す背後にある何かの連続的だと考える。彼に従えば、この連続的なものこそが内包量である。「内包量は絶対的に連続性の意味と一致する。」<sup>14</sup>端的に言うと、コーヘンは「<連続性=内包量>からの外延量の生産」に実在を位置づけようとする。

このコーヘンの挙措が、『差異と反復』におけるドゥルーズの理論的枠組と大枠で一致する点はドゥルーズ読者にとって見易い。ドゥルーズがカントを超克しつつ自らの理論体系を構築する為、その核心的アイデアをコーヘンら新カント派から得ていたことがここで確認される。更に、コーヘンによる歴史的説明に従えば、既にガリレオが「内包的=強度的なもの」の中に単なる「非延長的なもの」というネガティブな規定のみを見るのではなく、加速における強度的な力のポジティブな意味を見出していた。1695年にはライプニッツもこう述べている。「物体的事物の中には延長に加え、

それに対し第一のものである何かがある。・・・それゆえ諸事物の本性のうちには幾何学の対象、即ち延長以外の何ものかが在ることとなる。」<sup>15</sup>これらを踏まえると、ドゥルーズを「ガリレオ・ライプニッツ・新カント派」という「内包的なもの」の「延長的なもの」への先行性、内包量の持つ生産性を強調する系譜に連なる哲学者であると位置づけることが可能となる。

他方で注目しておきたいのは、カントは自らの可能性を自らで封印したというドゥルーズの指摘を裏付けるような詳細な検討をコーヘンがカント哲学に対し施している点である。コーヘンに従えば、カントの著作の詳細な検討から、カントが内包量を外延量の基礎として位置づける方向性や<sup>16</sup>、実在を「質の統一性」と捉える思考を持っていたことが窺えると言う。<sup>17</sup>例えばカントは以下のような言葉を遺している。

「私は、統一としてのみ理解されるこの大きさを、そこにおいて多様性が否定性=0への漸近としてのみ表象される大きさであるが、内包量と名づける。」<sup>18</sup>

「全ての大きさは、離散的大きさであるか、連続的大きさである。後者は各統一性の大きさであり、それが無ければ離散的大きさも存在しえない。というのも、全ての大きさにおける全体と部分とは常に同質的でなければならないからだ。構成の前にそれとして認識される量は連続体である。」<sup>19</sup>

確かにカントは、「統一としてのみ理解される連続的大きさ=内包量」が「離散的大きさ」を構成するという着想を持っていたようである。ここでの「統一性」が、外延量の持つ「多数性の統一性」ではなく「統一性としてのみ思考されるべき統一性」である点に注意せねばならない。コーヘンによると、この統一性は「無限小の統一性」である。

「ここで問題とされているのは、そこから全外延量が構成され、その内に全外延量が<基礎>を持つ起源とみなされる無限小の統一性である。ガリレオやライプニッツが内包量としての無限小を語

ったのはこの意味においてである。」<sup>20</sup>

コーヘンにとっての内包量とは「無限小の統一性」であり、それはガリレオやライプニッツの伝統に連なる概念である。カントは「知覚の予料」の原理の定式化においては「度合い」という外延量的な発想で内包量を捉えてしまっているが、他方でガリレオやライプニッツに通じる「無限小の統一性」としての内包量概念も十分に理解していたとコーヘンは見做す。

また、「生産力」を持つこの「無限小の統一性」としての内包量は、コーヘンによって「無限小量＝微分量」とも称される。（「内包量とは無限小量＝微分量以外のものを指示しない。」<sup>21</sup>）「無限小量＝微分量」とは、外延量とは異なり、そこにおけるいかなる部分も最小とはならない（いかなる部分も「単純」とはならない）量のことであり、連続性の法則に結び付けられる。この特性により「無限小量＝微分量」である「内包量」は生産力を持つこととなる。

この点について、カント自身の言葉に次のものがある。「实在の生産は、外延量の契機と微分的な準契機を持つ。」<sup>22</sup>「準」という限定詞付きながら、カントも微分的契機に实在を生産するものという定義を与える方向性を隠し持っていたと理解できるだろう。「内包量からの外延量の生産」という事柄の認識にカントは限りなく接近していたが、最終的には「心理主義」に留まり真の实在を捉え損なってしまった、これがコーヘンによるカント解釈であり、ドゥルーズがそれを継承するという流れである。

以上、コーヘンによるカント批判の内実をコーヘン自身の言説に遡行し確認してきたが、この作業によりドゥルーズがコーヘンを評価することの意味が見え易くなったはずである。ドゥルーズがカント哲学の乗り越えに当たり、ガリレオ、ライプニッツ、新カント派という「内包量からの外延量の生産」を主張する系譜に立つことを選んだ点、また、ドゥルーズの両義的なカント評価がコーヘ

ンによるカント理解に多くを依拠するものだと考えられる点は明らかである。カントは残念ながら「ものの立ち現れの次元」を捉え損なってしまった。では、コーヘンやドゥルーズはどのようにして、どのような意味でそれを捉えようとするのか。そもそも外延量を超えて「ものの立ち現れの次元」を捉えるとはどういうことなのか。この問いを展開する中で、コーヘンとドゥルーズとの相違、ドゥルーズによる内包量概念探究の行き着く先も見えてくるはずである。

コーヘン研究書を戦前に著した佐藤によれば、「内包的なもの」を古典哲学者の中で最も明瞭に説いたライプニッツこそが、コーヘンの理論形成に対し最大の影響を与えた。「コーヘンの内包量の原理の生誕地はライプニッツである」と彼は言う。<sup>23</sup>佐藤の議論を参照しつつ、「微分」概念に着目し「ものの立ち現れの次元」を捉えることの意味について検討してみよう。

### 3. 微分から思考へ

改めて、そもそもなぜコーヘンはカントを批判する必要があったのか。コーヘンによれば、カントが本来目指した哲学的プログラムに従うとすると、实在性は（因果性と同様）経験を構成する為の超越論的条件でなければならない。それは思考のカテゴリーでなければならない。それにも拘らず、カント自身は内包量を感覚の持つ「度合」と規定してしまった。これは、实在性や内包量を感覚や知覚に対し二次的なものとしてしまう举措である。もし、知覚や感覚が客観性を供給し保証してくれるのであれば、カントによる批判は何の必要性もなくなってしまう。知覚や感覚の客観性はどこから来るかという問いに対し、知覚や感覚の客観性を持ち出して答えても、それは循環論法に他ならないからである。

よってコーヘンに言わせると、カントの志をカント以上に継承する為には、内包量を感覚の持つ規定という位置付けに落とし込んではいならない。

内包量は感覚の中に在るものではなく、感覚から解放されたものでなければならない。コーヘンが「感覚へと向かう」連続性の存在を強調する所以である。内包量をその地点に位置付けることで初めて我々は、「感覚の指示する内容を実在化、客観化」する手段を持つこととなる。

前述のようにコーヘンの理論枠組ではこの内包量が「無限小の統一性」や「無限小量」と等値される。歴史的に微分は様々な形で登場してきた。コーヘンによる歴史整理を手短に振り返れば、ニュートンやライプニッツによる微積分学の発見を近世において準備したものとして、「幾何学的動機」、「数論・代数における級数問題」、「力学における加速度問題」があった。例えば、幾何学ではケプラーに始まりデカルトやフェルマーへと続く「接線問題」が探究されたが、そこで無限小は曲線産出を行う積極的契機とみなされた。また数論・代数の領域に関してコーヘンは、「関数が代表する全数値が曲線の場合と同様、その微分により初めて存在しうるが故に、微分はこの実在性の根拠となる」と言う。更に微分の発見に際し決定的に重要だったのは力学であり、無限小を発見したガリレオからライプニッツにかけて、「加速度問題」として微分が扱われてきた。<sup>24</sup>

いずれにせよ重要なのは、微分に関する詳細な歴史研究から、コーヘンが単なる消極的極限としてではない「産出原理としての無限小」という観念を得る点、ライプニッツを「無限小＝微分」と「内包的なもの」との等価性を定式化した者として位置づける点である。<sup>25</sup>コーヘンがライプニッツを批判する論点もあるが、カントの計画をカント以上に推進し、内包量＝微分量からの外延量の生産という基本的枠組みを打ち立てる為に、彼がライプニッツに多くを負う点は動かない。コーヘンにとって「ものの立ち現れの次元」を捉えるとは、感覚されるものの彼方にある、「産出原理としての無限小」を事象の湧出点として捉えることに他ならない。

これに対し、ではドゥルーズは「ものの立ち現れの次元」をどのように捉えようとするか。

まず確認すべきは、ドゥルーズがライプニッツの天才を深く認めつつも、彼がコーヘンのように「産出原理としての無限小」に依拠することはない点である。ドゥルーズは「差異の哲学は・・・無限小に依存しない」と言う。<sup>26</sup>コーヘンとドゥルーズとの分岐点がここにある。

ドゥルーズが「ものの立ち現れの次元」を捉えるものとして提出するのが、「普遍的微分法」と称される発生論図式である。彼によれば、存在の諸領域（物質・生命・社会・・・）はそれぞれに対応する「理念」から発生するのだが、各「理念」がそれ固有の微分法を持つ。これら「理念」は全て、1)「量化可能性」・「質化可能性」・「ポテンシャルティ」という契機、2)「規定可能性」・「相互規定」・「十分な規定作用」という過程、3)「特異点」と「通常の点」との配分、4)一つの充足理由の総合的漸進を形成する「体の添加」、以上4つを備えるものだとされる。<sup>27</sup>

このドゥルーズの包括的な発生論図式については、様々な評価や態度が可能である。数学用語の無暗な転用だとして批判する者もいれば、ドゥルーズ哲学と数学との関係について真剣に問いを深める者もいる。<sup>28</sup>本稿において我々は、「ものの立ち現れの次元」を捉えるとはどういうことかという観点から、ドゥルーズがカントや新カント派を理解するにあたり参照したと思しきヴェイユマンの議論を参照しつつ、「普遍的微分法」をドゥルーズが提出した意味について考えてみよう。<sup>29</sup>

ヴェイユマンによると、新カント派にとっての内包量とは、究極的には「経験の可能性の真なる至高の条件の場」、「微分法の錬金術の中で自意識が対象意識を産み出すまさにコペルニクスの転回の点」であると言われる。その地点で我々は「発生と事実性」・「有限と無限」・「自己意識と対象意識」との同一性を掴むことになる。或いは我々は内包量の原理により、カント的ヌーメノンから現

象へ、思考から認識への移行が完成するのを見出しうるとヴェイユマンは言う。<sup>30</sup>しかし他方で彼は、以下のような文言で新カント派を批判する。

「ヌーメノンから現象へ、思考から規定への移行は勿論内在的発生ではあるが、この発生はまた完全に事実的なものではないか。」<sup>31</sup>

「コーヘンの解釈の中に我々が見出せないものは、哲学的思考の無条件性を救済する可能性であり、（哲学的思考の）内容を規定する際に誤って実証科学へと頼ってしまうことを回避する可能性である。」<sup>32</sup>

「内包量の原理として理解される超越論的構想力の発生は両義的なままである。それは<アプリアリ>に属するのか、<アポステリアリ>に属するのか。哲学的無条件性に属するのか、科学的条件づけに属するのか。経験可能性の原理に属するのか、この経験の所与に属するのか。」<sup>33</sup>

これらの引用の含意を纏めれば、新カント派の理論には「円環」があるということである。それは「超越論的なものと歴史的なもの」、「条件づけるものと条件づけられるもの」との混同から生じている。ヴェイユマンによると「無限小量=微分量=内包量」に「コペルニクス的な点」を置く新カント派にあっては、可能性が実在に、哲学が実効的科学に、発生が事実「借り」を持つことになってしまい、哲学は諸科学の「野卑な召使」になってしまうのである。<sup>34</sup>

「条件づけるものと条件づけられるものとの混同」という表現や、両者が織り成す「円環」という表現から、ドゥルーズによるカント批判の文言を想起することは容易だろう。ドゥルーズはカント哲学を、「超越論的なものを経験的なものの引き写しとして描いてしまう」と批判したのだった。<sup>35</sup>ヴェイユマンが新カント派を批判する同じ言葉で、ドゥルーズがカントを批判している点が興味深い。勿論我々はここで、ドゥルーズ自身がヴェイユマンによる新カント派批判に自覚的であったに違いないと考えねばならない。つまりドゥルー

ズはカント批判の道具として新カント派の理論を利用しつつも、更にヴェイユマンによる新カント派批判をも乗り越える形で、自らの議論を構築せねばならなかったということである。では、彼の包括的な発生論図式はこの課題にどのような意味で応えられているのだろうか。「ものの立ち現れの次元」を捉えつつ、「哲学的思考の無条件性」を救済するという課題を、その図式はいかなる意味で乗り越えているのだろうか。

まず確かなのは、ドゥルーズの発生論図式が「内包量からの外延量の生産」という枠組の精緻化である点である。ドゥルーズは『差異と反復』第4章・第5章において、様々な学知を動員しつつ、単なる「条件付け」ではない「真の発生」としての「諸理念の現実化」の図式を提出する。

「<理念>は・・・一つの内的多様体である。即ちそれは差異的諸要素の・・・多様な連結システムであり、実在的諸連関と現実的諸項において具現される。・・・各理念は有機体、心的現象、言語活動、社会に対応する。この類似的対応関係は<構造的-発生的>である。構造が同一律から独立しているように、発生は類似規則から独立している。」<sup>36</sup>ここで詳細に立ち入ることはできないが、ドゥルーズは「ものの立ち現れの次元」を「潜在的多様体としての理念からの、現実的諸事象の発生論」として描き出す作業を進める。これはドゥルーズの哲学的プログラムでは「純粋な差異と反復の世界からの、同一性と表象の世界の発生」の描写とでも表現できる作業である。

その上で注意すべきは、この作業により提出される存在論=発生論は、先のヴェイユマンの新カント派批判を踏まえるならば、諸科学の「野卑な召使」だと言われる可能性を持つ点である。確かにそれは新カント派（コーヘン）のように全面的に微分（数学）に依拠するわけではなく、熱力学・生物学等の諸科学の知見を総合し「哲学」や「形而上学」と称されうるレベルの抽象性・形式性へと高めた言説ではあるが、それが諸科学の知見に

根拠づけられている点は動かない。「ものの立ち現れの次元」を捉える為には、新カント派以上に洗練されたやり方においては、やはり諸科学に依拠せざるをえないかのようである。

では「哲学的思考の無条件性」を救う、という問題はどうなってしまうのか。これはそもそも「哲学」をどのような言説として位置づけるかの問題でもあり、様々な立場の取り方がありうる。諸科学の基礎づけ、諸科学の前提の検討、諸科学の知見の包括的視点からの整理など、諸科学と哲学との関係性は多岐にわたりうる。「哲学と諸科学との関係性」に関するドゥルーズの態度は時系列的に別途検討する必要があるが、彼自身の哲学的言説の生産が諸科学の知見の積極的摂取を不可欠の契機として含み続けた点は動かない。ドゥルーズの著作全体を俯瞰する位置から見ると、ドゥルーズが後年になり提出する、科学や藝術による創造行為と並び立つ「概念の創造」という哲学の定義が、最終的には「哲学的思考の無条件性」を救うものとなったと回顧できるだろうが、前期ドゥルーズ哲学の核心を為す内包量概念の検討を中心に据える本稿の論脈では、恐らく次のように考えるべきだろう。即ち、普遍的発生論図式を彫琢する前期ドゥルーズの哲学的営為において、「哲学的思考の無条件性」は、世界の発生と並行的に「思考の発生」が描かれることでその救済が図られている。

「思考の発生」は、ドゥルーズ哲学の通奏低音のように響き続ける問題である。前期主要著作『差異と反復』の中だけを見ても様々な議論が錯綜しつつ存在し、集中的に別途その全体像を検討する必要があるが、特に発生論との絡みで注目すべきは、「思考」を「理念の現実化を規定する身体や事物」と等置する点である。「全ての身体や全ての事物は、強度的諸理性へと還元され、現実化を規定する理念を表現する限りで、思考する者であり、思考そのものである。」<sup>37</sup> 解りやすい事例で言えば、生命体の発生を生きる「胚」もまた「思考する者」であることとなる。ポイントは、これを逆に見る

と、「哲学的思考」も一つの生命体のようにこの世界に生れ出て来ることが求められるという点である。哲学的思考の「無条件性」とは、諸科学の知見から離れた上空飛翔的な思弁の展開や諸科学の知見の基礎づけではなく、世界へと諸事象が生まれ出ずるように、思考もこの世界へと生れ出ることにある。

纏めよう。ドゥルーズにおいて、「ものの立ち現れの次元」を捉えようとする試みは、内包量や微分の議論を経由し、必然的に「思考の発生」の議論へと逢着する。内包量を見据え世界の発生を描き出そうとする試みは、その試みの中に自らの運動をも描きこまねばならない事態に到達する。ここにドゥルーズによる内包量論が辿る奇妙な道筋がある。本稿ではこの「思考の発生」の問題系全般を探索することはできないが、以下、ドゥルーズによる「思考の発生」の議論について今後検討されるべき問題を提起しておきたい。

#### 4. 「思考の発生」を巡る問題系

ドゥルーズが『差異と反復』第3章において「再認」を目指すドグマ的思考のイメージを批判した点は既に哲学史的知識の一部となりつつあると言えるかもしれない。ドゥルーズの前期哲学の主要課題の一つとして、良識と共通感覚を駆使しつつ差異を同一性へと従属させる西洋哲学の伝統的思考を転倒させ「イメージ無き思考」に達することが挙げられる。「ものの立ち現れ」を語る中で同時に「思考の発生」を語ることもこの課題を果たす上で必要な契機である。存在の運動と思考の運動とが等しくなること、即ち「存在＝思考」という等式の実現が追求されたとも言えるだろう。「胚」もまた「思考者」であるとされる所以である。

他方、特に前期ドゥルーズにおける「思考」のモデルが藝術作品の創造行為に肯定的価値を置くものであることも忘れてはならない。<sup>38</sup> とりわけ『差異と反復』におけるドゥルーズにとっては藝術が持つ「反復」の力が評価されるわけだが、ド

ドゥルーズによるニーチェの「永遠回帰」解釈問題とも絡む「第三の反復」の場が最重要である。<sup>39</sup> 永遠回帰と等置されるこの「第三の反復」は、「我々に最も理解し難い」・「未来に関係する」・「一度で偶然の全体を肯定する」・「神的な賭け」だと規定され、この反復に最も近いものとして藝術作品が挙げられる。<sup>40</sup> 「永遠回帰」という「神的な賭け」の結果、「存在の美的正当化」として藝術作品が産み出されるという着想はニーチェに由来する。ドゥルーズは「否定的なものを一切放逐する新たな思考方法＝超人の思考」への近似値として藝術作品創造を捉えており、少なくとも『差異と反復』の時点では、再認を目指す従来の哲学的思考よりも上位に藝術作品創造を据えていると言える。

改めて確認しよう。「ものの立ち現れ」の運動と同じ運動の中で思考は発生せねばならない。また、「超人の思考」の近似値としての「藝術作品創造」が来るべき思考のモデルと見なされる。以上を踏まえた上で、ここでドゥルーズの思考論の全体的検討の為に重要となる論点として、思考における意志性と非意志性との問題を取り出しておきたい。

ドゥルーズにとって「思考の発生」が能動的・意志的になされうるものではない点は見やすい。そもそもドゥルーズは意志的に世界の再認を目指す思考のイメージを批判することを目指し、思考が非意志的・無意識的に始まることを強調する文言は各所に散見される。思考は思考に対し「思考せよ」と強制するものとの出会いからしか始まらない。<sup>41</sup> これはドゥルーズがアルトーやブランショから彼なりのやり方で継承する、決して譲らない論点である。この着想こそがドゥルーズ哲学の根本姿勢を表現するものであることも確かである。

しかし他方で、ドゥルーズのこの根本姿勢を理解しつつも、彼のこの文言を繰り返すのみでは、我々の進むべき道が見えにくいのもまた確かであるようだ。「偶然の出会いによる思考の発生」・「一度で偶然全体を肯定すること」・（ドゥルーズ哲学全体を俯瞰する位置から見て）結果として「概念」

を創造すること、これを繰り返すように呟き続けても得られる点は少ない。そこで、一方ではこれらの言葉の含意を掘り下げる作業を進めると同時に、他方でドゥルーズが十分に展開していないと思しき「思考を発生させる方法」を突き詰める必要があるのではないだろうか。これは、ドゥルーズが思考の運動の非意志性・受動性を強調するあまり見え難くなっている、「思考の発生」における非意志性・受動性と意志性・能動性との絡み合いを改めて問いに付すことだとも言える。

この点について具体的には、ドゥルーズが「諸多様体と諸主題を踏破し記述する」方法として示唆する「副次的矛盾」の方法の再検討が必要だろう。彼の議論はやはりそこでも「体の添加」や「諸特異性の凝縮」という数学用語を援用するものだが、他方でレイモン・ルーセルやレーニンなどへの言及も見られ、その含意が理解し尽くされているとは言い難い。<sup>42</sup> この「副次的矛盾」の方法の再検討を踏まえた後、中期・後期ドゥルーズの哲学方法論へと進んで行くこと、これがドゥルーズの思考論の全体像を見通す為に今後歩まれるべき道である。

## 5 結論に代えて

本稿では、ドゥルーズによるカントの内包量概念批判から出発し、コーヘンによるカント批判やヴェイユマンによる新カント派批判へと遡行しその詳細を検討することで、ドゥルーズとカントや新カント派との立ち位置の相違が明らかになった。同時にこの過程で、ドゥルーズ哲学において内包量概念の探究が微分概念を経由し「思考の発生」の問題へと逢着せざるをえない点も確認された。それを踏まえ「思考の発生」という問題系については、ドゥルーズの基本的立場を理解しつつも、「方法」という観点からそれを再検討する必要があることが示唆された。

- 1 「知覚の予料・火・エーテル演繹」(『坂部恵集 1 生成するカント像』・岩波書店・2006 所収)
- 2 『カント純粋理性批判入門』(高峰一愚・論創社・1979) p. 214-p. 215
- 3 『カント「純粋理性批判」註解』(N・ケンプ・スミス・行路社・2001) p. 523-p. 532
- 4 「知覚の予料・火・エーテル演繹」(『坂部恵集 1 生成するカント像』・岩波書店・2006 所収)
- 5 “Différence et répétition” (Gilles Deleuze, P. U. F., 1968) p. 82 以下書名を【DR】と表記。
- 6 【DR】 p. 347
- 7 【DR】 p. 347
- 8 “La théorie kantienne de l’ expérience” (Hermann Cohen, traduit de l’ allemand par Éric Dufour et Julien Servois, Paris : Éditions du Cerf, 2001) 以下書名を【TKE】と表記。
- 9 “Le principe de la méthode infinitésimale et son histoire” (Hermann Cohen, introduit, traduit, et annoté par Marc de Launay, Vrin, 1999) 以下書名を【PMI】と表記。
- 10 【TKE】 p. 430
- 11 【TKE】 p. 432
- 12 この点について特にコーヘンは、「知覚の予料」の原理の証明における以下の心理学的表現に顕著であると言う。「経験的意識の純粋意識への漸進的変化は可能である。・・故にまた、その始まり以来の、感覚の大きさの総合、純粋直観=0から、感覚の一定程度の大きさまでの変化も可能である。」【TKE】 p. 440
- 13 「連続性は感覚に属するものではない。それは単にこの感覚内容のアプリオリ化 (l’ apriorisation) に関係する。この関係は内包量の中に見出される。」【TKE】 p. 442
- 14 【TKE】 p. 442
- 15 【TKE】 p. 436
- 16 「故に私達は、速さという契機を、既にそれ自身が一つの速さであるものとしてではなく、一つの物体がある速さに到達しようとする努力と捉えねばならない。外延量としてではなく、外延量を基礎づける内包量として捉えねばならない。」【TKE】 p. 436
- 17 「質の統一性は全ての基礎とみなされねばならず、量の統一性は全ての一部とみなされねばならない。その結果、我々は熱に対して、本来の意味での量ではなく、程度を帰することができることとなる。そこで見出される統一性は、質的統一性である。そこで構成されるものが区分

- された(数による)大きさである統一性は、量的統一性である。」【TKE】 p. 437
- 18 『純粋理性批判』B版 210
- 19 【TKE】 p. 437
- 20 【TKE】 p. 433
- 21 【TKE】 p. 433
- 22 【TKE】 p. 437
- 23 『コーヘン』(佐藤省三・弘文堂・1940) p. 118 -p. 121 以下書名を【佐藤】と表記。
- 24 この歴史的回顧に関する詳細は【佐藤】 p. 110-p. 117 参照。
- 25 「コーヘンが微分法により主張する内包量的な考えの立場は、無限小の代表する統一が斯くの如く単に消極的に無視されうるもの或いはゼロに帰し得べきものというような還元的なものではなく、接線の問題において殊に高次微分論に見られる様な内包的に無尽蔵なものとして発揮する積極的・創造的なく構成的なもの>たるべきところにある。」【佐藤】 p. 134-p. 135
- 26 【DR】 p. 221
- 27 【DR】 chap. 4
- 28 後者については特に“Virtual mathematics : the logic of difference” (Simon Duffy ed., Clinamen Press, 2006) 所収の諸論文が参考になる。
- 29 ドゥルーズはコーヘンによる内包量原理の強調を賞賛するが、彼のこの態度はヴェイユマンによる新カント派研究 (“L’ héritage kantien et la révolution copernicienne : Fichte, Cohen, Heidegger”, Jules Vuillemin, P. U. F., 1954 以下【HKR】と表記) に依拠していると推察される。ドゥルーズ自身が参照を指示するヴェイユマンの文言を辿れば、ドゥルーズの新カント派理解に対するヴェイユマンの影響は明白である(特に第16節「内包量の超越論的意味」、第17節「新カント派解釈における諸概念の移動」)。例えばヴェイユマンは以下のように言う。「内包量原理は超越論的原理の問題に答える。そこにおいて内包量原理は、可能的経験の対象を定立するのみならず、この対象の発生をも支持する。内包量の原理は<対象性の起源>である。」【HKR】 p. 195) 或いは、「内包量によって感覚はアプリオリな領域へと統合され、それが開く質を客観化する能力を受け取る。」【HKR】 p. 196)
- 30 【HKR】 p. 201-p. 202
- 31 【HKR】 p. 203
- 32 【HKR】 p. 203
- 33 【HKR】 p. 203

---

<sup>34</sup> 【HKR】 p. 204

<sup>35</sup> 【DR】 p. 176-p. 177

<sup>36</sup> 【DR】 p. 237-p. 238

<sup>37</sup> 【DR】 p. 327

<sup>38</sup> そもそもドゥルーズは『差異と反復』という著作の表現様式自体が当時の藝術の様式革新に対応する試みだと述べている。「まさに表象の放棄に至る一つの道が・・・藝術作品により哲学に指示されている。」(【DR】 p.94)

<sup>39</sup> ドゥルーズは藝術が(言語や無意識と共に)提起する「反復の力」に注目する。『差異と反復』で特に「藝術」の名の下に重視されるのは文学作品である。「第一の反復」に関わる「幼生の主体」や「受動的綜合」の議論ではベケットやヌーヴォー・ロマンが名指しされ、「水平的反復」と「着衣の反復」を対比させる議論ではルーセルやペギーが「言語の病理学的力を藝術的水準にまで高めた」と言われ、「着衣の反復」の例証となる。【DR】 p. 34, p. 107-p. 108

<sup>40</sup> 【DR】 p. 152-p. 153, p. 255-257

<sup>41</sup> 【DR】 p. 181-p. 182

<sup>42</sup> 【DR】 p. 245-p. 246